

■ 坂口 智香さん（農業部門） 「やっぱり笑顔がいい」

2020 年は、新型コロナウイルスの影響で、世の中が大きく変化した年です。感染された方にはお見舞いを、また亡くなられた方には心からご冥福をお祈り申し上げます。今もその影響が続き、不安を抱える毎日を送る人も多いと思います。私は、自分の社会貢献について、あらためて考えています(まだ進行形)。私が技術士になったきっかけを振り返り、コロナ禍で今感じていることを発信したいと思います。



自撮り笑顔写真

私は企業に属する技術士で、食品会社に勤めて 18 年になります。入社前は、こんなに長く務めるとは思っておりませんでした。学生の頃から食品分析が専門でしたので、研究所に入職し、その専門性を活かせる部門に配属されたのはラッキーでした。

入社当時、中国産冷凍ホウレンソウの残留農薬問題がおこり、海外の原料に頼っていた日本の食品業界において、大問題となっていました。その後、国内でも一部の農産物に法律で定められた基準値を超える残留農薬が見つかりました。消費者は、毎日の食事に農薬が残留しているかもしれないという不安から、連日の報道を高い関心を持って見ていたと思います。当時の食品会社は、輸入される原料野菜の残留農薬の分析をロットごとに実施し、問題ない原料のみを加工に使うということに尽力していました。朝から晩まで残留農薬をチェックする日々・・・その時に、日本の「食」は、食材の多くを海外の農畜産物に頼り、脆弱なのだと感じました。私にできることは無いか、と考えたのが、技術士を志すきっかけとなりました。思い立ったら、すぐ実行のタイプですので、すぐに試験を受け、ちょうど 30 歳の時に技術士となりました。

現在、食品における残留農薬問題は、水際対策から法改正などの根本的な課題解決へとつながり、安全な食生活が送れるようになってきています。この問題の解決の裏には、農業技術の浸透や検査技術の進化がありました。食のおいしさ、楽しさ、やさしさの裏にはたくさんの技術があります。そんな食品のサプライチェーンを技術で支えることが、私の生涯の仕事です。

長年、企業にいますと、人事異動があります(すべての企業においてではありません)。私は今、会社の技術戦略を構築する仕事をしており、技術開発や活用する現場からは離れています。今の自分は技術士と名乗ってよいものかどうか・・・と悩むこともありました。企業内技術士で、同じように悩まれたことのある



離乳食と息子の笑顔

方もいると思います。また、私には 2 人の息子がいます。産休育休で、技術開発の現場どころか、会社からも離れていた時期もあります。でも、息子の授乳や離乳食で、人が生まれてから普通の食事をするようになるまでを経験し、「自分が食品分野に関わる技術士で良かった。毎日が自己研鑽」と前向きにとらえることができました。そして、会社の技術戦略をつくる立場にいる今の仕事こそ、会社が社会に貢献するために、何をするのかを決める技術士としての重要な役割だと捉えています。

今年に入って、新型コロナウイルスが世界中に拡がり、人々の生活は一変しました。緊急事態宣言による休校・休園・在宅勤務での巣ごもり生活の中では、食事は数少ない楽しみの一つでした。我が家では、家族が笑顔になるようにと食事やおやつを用意していました。仕事もありますから、自炊だけでなく宅配やテイクアウトも使いました。あらためて、食の大切さと笑顔をつくるパワーに気づきました。おいしいと、自然と笑顔になります。また、日々の健康には、バランスの良い食事が不可欠です。人々の食に対する意識の変化は様々なデータにも表れています。未来の食卓にも笑顔があふれているように、必要な技術をこれからも提供していきたいと思っています。やっぱり笑顔がいい！